

# ドイツ・ロマン主義 1

藤 本 正 幸

## Die deutsche Romantik 1

Masayuki FUJIMOTO

### Abstract

Die deutsche Romantik, die vielseitig und mehrdeutig war, entwickelte sich in den letzten Jahren des 18. Jahrhunderts und wirkte bis über das erste Drittel des 19. Jahrhunderts. Sie umfaßte alle Gebiete: Dichtung und bildende Kunst, Geschichte und Naturwissenschaft, Politik und Religion. „Die Französische Revolution, Goethes Meister und Fichtes Wissenschaftslehre sind die größten Tendenzen dieses Zeitalters“, erklärte Friedrich Schlegel. Darin besteht ein Kern der deutschen Romantik. Daher muß die deutschen Romantik, im Zusammenhang mit der Französischen Revolution, interpretiert werden. Die politische und gesellschaftliche Enttäuschung veranlaßte den Romantikern die Sehnsucht nach dem Mittelalter, die Neigung zum katholischen Glauben. Die Romantiker erschlossen die Kunst des Mittelalters, die Volkspoesie in Liedern, Märchen und Sagen, ebenso die Weltliteratur bis zum fernen Indien. Später, in der Zeit der Napoleonischen Krieg, hatten viele Romantiker nicht mehr solche philosophisch betrachtende, sondern die handelnde Haltung zu Staat und Volk, die nationale Strömung.

ロマン主義運動は18世紀の後半より19世紀の初頭にかけて、ほぼヨーロッパ全域に広がったもので、文学のみならず、音楽、絵画等、芸術一般に強く影響を与えている。ただそれは広範な、包括的な文芸運動であるため、これを一面的に定義づけることは困難である。特にドイツロマン主義は種々の要素が含まれており、例えば18世紀の文学史における特殊性、その把握の仕方によって、Fr. Strich の Deutsche Klassik und Romantik におけるようにドイツ古典主義の「完成」に対する「無限」という把握の仕方、また H. A. Korff の Geist der Goethezeit に見られるように1770—1830年を「ゲーテ」時代とよび、ロマン主義をシュトゥルム・ウント・ドラング、ドイツ古典主義に続く一つの運動であるとする把握の方法もある。本稿においては、まずドイツロマン主義の時代の背景、およびその区分を述べ、ドイツ

ロマン主義の概観をつかもうとするものである。

ドイツロマン主義の理論的指導者 Fr. Schlegel が断章において、フランス革命、フィヒテの知識学、ゲーテのマイスターは、時代の最も大きな趨勢であると指摘したように、フランス革命はドイツロマン主義の成立にとって決定的な意味を持っている。ロマン主義運動とフランス革命、18世紀末におこったこの二つの出来事には、本質的に一つの共通点が見い出される。旧体制の打破ということである。即ち、ともに自由のための情熱的な闘いである。自由という理想は、ロマン主義理論を特徴づける個性の尊重や、主観主義的な物の見方と合致するものであった。フランス革命の報を聞いた多くの人々は革命こそやがて新しい時代を切り開いてくれるものと信じ熱狂したのである。しかしその期待は幻滅へと変わってくる。フランス革命後、すでに1792年に革命指導者達はヨーロッパ全体に対して宣戦を布告する。1793—94年の恐怖政治、プロイセン・オーストリア両国は敗れラインラント・ベルギーがフランスの支配下になる。革命が自由と博愛を、そして文明の悩めるすべてを癒してくれるのではないかという期待は、完全に裏切られ政治的、社会的不安がロマン主義者達の間に広がる。当時の時代精神の混乱は、Fr. Schlegel の *Signatur des Zeitalter* に見られるように、やがて終幕の日がくるのではないかという黙示録的な見方もすでにこの時期にあったようである。このような精神の混乱、不安な予感の中でロマン主義者達は極端な主観主義に傾斜していくのである。Fr. Schlegel は、初期において *Über das Studium der griechischen Poesie* (1796) に見られるように、古代の客観性と近代の主観性の相違を明らかにし、その調和を求めたのであるが、1794年 J. G. Fichte の *Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre* が出版されるとその思想に啓発され、自らも自由意志を強調するようになる。フィヒテの思想体系は、いわゆる「絶対自我の哲学」である。個人の自我のみが、唯一信用出来るものに思えた当時のロマン主義者はフィヒテの哲学に強い感銘を受けたのである。Fr. Schlegel がフィヒテの知識学をフランス革命に匹敵する出来事と位置づけた時代の精神である。

Fr. Schlegel は1798年兄 A. W. Schlegel と共に雑誌 *Athenäum* (1798-1800) を創刊する。断章の形で書かれた彼の芸術理論は、フィヒテの哲学に啓発され自らの理論をさらに発展させたもので、ドイツロマン主義宣言といえるものである。「ロマン的文学とは進展的普遍文学である。その使命は、ただ単に文学のすべての分たれたジャンルを再び結合し、文学を哲学や修辞学に接触させたりすることにあるだけではない。ロマン的文学は、詩と散文をも、独創性と批評をも、技巧詩と自然詩をも、すべてを混合し、また融合すること、文学を生き生きと躍動させ社交的にし、生活と社交とを詩的にすること、才気を詩化し、芸術の諸形式

をあらゆる種類の確実な素材で満たし、満足させ、フモールの羽ばたきで活気づけることを意図とし、かつそれを行うことを義務とするものである。それはおよそ詩的であるすべてを包括する、幾多の組織をその中に含む最大の芸術の組織から、夢みる子供の作為のない歌の中の吐息、接吻まで……ロマン的文学はまだ生成のさなかにある、否、永遠に生成し、決して完成しないことこそ、この文学の本来の性質なのである。それはいかなる理論によっても汲み干されることはない、ただ予感的批評のみが、あえてその理想を特質づけようとするものが許されるであろう。それは、ただその文学のみが自由であり、かつ自らの第一法則として詩人の自由意志はいかなる法則をも甘受しないことを確認するとき、この文学は無限である。ロマン的文学様式は、様式以上のもの、いわば文学そのものである。なぜなら、ある意味において、あらゆる文学はロマン的であり、またロマン的であらねばならないのだ」

Fr. Strich が *Deutsche Klassik und Romantik* において、ドイツ古典主義の「完成」に対してロマン主義の「無限」という概念をうちたてているように、一般的にロマン主義の性格は、無限への憧憬、自我の拡大、精神の絶対的自由といわれるものであり、それらをもとに新しい文学を樹立しようというものであった。また H. A. Korff は、その *Geist der Goethezeit* において1770～1830年を「ゲーテ時代」とし、ロマン主義を、シュトゥルム・ウント・ドラング、ドイツ古典主義に続く一連の運動と規定している。シュトゥルム・ウント・ドラングは、若きゲーテやシラーによる文学運動で、理性万能の啓蒙主義に対して旧規範を廃し、感情の解放を強力に押し進めたものである。Korff のこのようなとらえ方からみても、ロマン主義には、旧規範に対する反発、解放という要素が大きな部分を占めている。このような一面を持つドイツロマン主義の詩人達が、同時に、過去、特に中世への傾斜をみせることがしばしば問題となる。シュトゥルム・ウント・ドラング期にゲーテはすでに *Götz von Berlichingen mit der eisernen Hand* (1773) において中世の騎士道を描いているが、中世讃美が顕著なものとなったのはこのロマン主義の時代である。H. G. Schenk はその要因の最大のものとして、宗教的要因をまず第一にあげている。時代の混乱、不安定な精神、このような状況の中で人々の信仰は次第に薄れてゆき、やがて人々は重大な損失をこうむるのではないかという不安がロマン主義の詩人達の心にあった。それ故、彼らはあのキリスト教的中世の時代の範例を敬い、これにならおうとしたのである。当時のロマン主義者達には、中世の信仰の時代はまばゆく輝く時代と映ったのである。このような中世の人々の敬虔さに対する讃嘆の念は、Novalis の Heinrich von Ofterdingen (1799-1800) や、中世を讃美した論文 *Die Christenheit oder Europa* (1799), C. Brentano の *Die Chronik eines fahrenden Schölers* (1802), J. Görres の *Die christliche Mystik* (1836-42), Fr. Schlegel の *Philosophie*

der Geschichte (1829) の中世解釈にみられる。

政治的、社会的要因も見落すことが出来ない。フランス革命が幻滅を与え、ナポレオンが権力をふるい、ドイツ神聖ローマ帝国が解体されたこの時代において、ドイツ史における最も輝かしい時代である中世への思いが多くが人々の慰めとなった。さらに彼らは、中世の持つ政治構造、例えば、自由都市、ギルド、自治体といった大きな中間勢力、これらが政治における過度の集権化と、絶対主義に対抗しうる働きを持っていたと考えていた。また同時に、下から絶えず拡大されつつある無秩序に対して、中世における複雑で厳格な位階制度が再評価された。ロマン主義の中世への回顧的傾向は、フランス革命以後のこれら政治的、社会的不安とも結びつき一つの要因となっている。

そして、この中世讃美は祖国ドイツの古い芸術や文化の再認識へ通じるものであった。これまで埋れていた優れた民謡、民話、童話がロマン主義者達によって次々と世に出された。C. Brentano と A. Arnim によるドイツ民謡集 *Des Knaben Wunderhorn* (1806-8)、Jacob Grimm と Wilhelm Grimm の兄弟により丹念に聞き集められたドイツの古い民間童話集である *Kinder-und Hausmärchen* (1812-22)、同じく Grimm 兄弟によるドイツ伝説集 *Deutsche Sagen* (1816-18)、その他にも J. Görres による民話集 *Die deutschen Volksbücher* (1807) があり、以後のドイツの詩人に与えた影響は多大のものであった。また古い民話に取材した作品としては L. Tieck の童話 *Die schöne Magelone* (1796)、*Der getreue Eckart* (1799)、悲劇 *Leben und Tod der heiligen Genoveva* (1799)、喜劇 *Kaiser Octavianus* (1801) がある。

これらロマン主義者達による過去への探求は、その領域を多彩なものとした。F. Schlegel の *Über die Sprache und Weisheit der Inder* (1808) におけるごとと、東洋の哲学や思想に関する研究、Grimm 兄弟による *Deutsches Wörterbuch* の編纂、兄 J. Grimm による *Deutsche Grammatik* (1819-37)、*Deutsche Rechtsaltertümer* (1828)、*Geschichte der deutschen Sprache* (1848)、弟 W. Grimm による *Deutsche Heldensage* (1829) 等、ロマン主義の学問の分野においても残した功績は大きなものであった。

中世讃美と並びロマン主義者のカトリシズムへの復帰がドイツロマン主義の特徴であり、これが反動的な一面を持つといわれるものである。F. Schlegel やローマ在住のドイツ「ナザレ派」の画家達におけるカトリックへの改宗、J. Görres や C. Brentano のように、一時期宗教から離れ再びカトリックの教会に戻った詩人達。H. Heine は *Die romantische Schule* (1816) において、この現象を、中世の巨匠達がその奇跡的な靈感を汲みとったのと同じミュー

ーズの泉へ旅立とうとし、彼らはローマへの巡礼の旅にのぼった、といっている。また、ゲーテは *Dichtung und Wahrheit* (1811-14) において、プロテスタントにはわずかな秘跡しかない、と述べているように、多彩な美的感受性を持ったロマン主義の詩人達が、宗教的祭祀や儀式に対するカトリック的態度により多くの共感を覚えたのであろう。改宗の問題について、ロマン主義の枠内から一面的に接近するのは適切ではなからうが、当時の時代精神のもとに生まれた中世讃美が一つの大きな要素となっているのであろう。

中世讃美の傾向は、後期のロマン主義に見られる民族意識の高揚につながっている。フランスがナポレオン体制に入り、フランスの攻撃を受けたプロイセンは1806年イエナの戦で敗れ崩壊する。しかしシュタインやハルデンベルク等の政治家により、内政がととのえられ国内の復興も徐々に進み出した。1810年にはベルリン大学が創設され教育や科学の分野が充実される。このような状況のもとに、ドイツ統一を旗じるしに祖国愛に目覚めた詩人が輩出する。ベルリンに招かれたフィヒテの「国民に告ぐ」*Reden an die deutsche Nations* の演説や E. M. Arndt の *Geist der Zeit* の第一部 (1506) は、人々を熱狂させロマン主義詩人にも強い影響を与えた。M. Schenkendorf の *Freiheit, Scharnhorsts, Soldaten-Morgenlied* 等の愛国詩、自ら解放戦争に参加し22才で戦死した T. Körner の愛国詩集 *Leier und Schwert* (1814)、F. Rückert の *Deutsche Gedichte von Freimund Reimar* (1814)、Kranz *Zeit* (1817) 等、反ナポレオン闘争は後期のロマン主義詩人の舞台となったのである。

ドイツロマン主義を区分すると、大別して初期ロマン派と後期ロマン派とに分けられる。初期ロマン派は、イエナーを中心に運動したためイエナー・ロマン派と呼ばれることがある。新しい文学をめざし機関誌「*Athenäum* (1798-1800)」を刊行しロマン主義理論を発展させたグループで、参加者は F. Schlegel, A. W. Schlegel, Novalis, L. Tieck であり、Tieck を通してであるが W. H. Wackenroder もこのグループに入る。その出発の時期には諸説があるが、「ロマン的文学」という言葉が最初に使われたのが *Athenäum* の創刊号であるため、その刊行の年1798年にするか、またグループの一員である W. H. Wackenroder の *Herzensergießungen eines Kunstliebenden Klosterbruders* (1797) の出版された年1797年にするのが妥当であろう。また初期ロマン派の終りの年は1801年とするのが一般的である。

後期ロマン派は、初期ロマン派のように共通の意志を持った一つの結社的存在ではなかったために、各々の地方に分れ、ハイデルベルク・ロマン派、ベルリン・ロマン派、シュヴェーベン・ロマン派に小区分される。初期ロマン派が理論の確立に力をそそいだため作品としては多くを残さなかったのに対し、後期ロマン派はその理論を作品の上で展開させたのである。

ハイデルベルク・ロマン派 C. Brentano, A. v. Arnim, B. v. Arnim, J. Görres, J. Grimm, W. Grimm, J. F. Eichendorf.

ベルリン・ロマン派 Fouqué, A. v. Chamisso, E. T. A. Hoffmann, W. Müller

シュヴァーベン・ロマン派 L. Uhland, J. Kerner, G. Schwab, W. Hauff, K. Gerok, H. Kurz, G. Pfizer, J. G. Fischer, E. Mörike.

尚、これ以外の区分方法として、H. A. Korff は Geist der Goethezeit において、初期ロマン派に続き盛時ロマン派 (die Hochromantik) という区分を与え、その中にハイデルベルク・ロマン派とベルリン・ロマン派を含めている。また G. Stenzel の Die deutschen Romantiker では民族ロマン派 (National-Romantik) と名づけ、1804年から1814年の民族意識の高揚時代を区分し、その中にベルリン・ロマン派、シュヴァーベン・ロマン派、愛国詩人と呼ばれる T. Körner, E. M. Arndt, M. Schenkendorf を含めている。

#### 参 考 文 献

H. A. Korff: Geist der Goethezeit III. IV Teil

F. Martini: Deutsche Literaturgeschichte

H. G. Schenk: The Mind of the European Romantics

G. Stenzel: Die deutschen Romantiker

E. Frenzel: Daten deutscher Dichtung

A. Biese: Deutsche Literaturgeschichte Zweiter Band

玉林憲義：独逸浪漫派の時代区分 関西学院大学 独仏文学研究（第三輯）

ドイツ文学史：東京大学出版会